

● 桃太郎の誕生

● 女性と民間傳承

柳田 國男著

柳田國男氏の學問は今日われ／＼の學界に於て特異な位置を占めてゐる。一方に於ては、氏の周圍には常に新しく加はりつゝある熱心な追隨者があり、それらの人々からは氏は言はゞあが佛として崇敬されながら、他方それ以外の人々からは既にこの比喻が暗示するやうに當然受くべき顧慮なきへも拂はれずにある、それは異端として排撃されるといふよりはむしろ全然關心の外に置かれてゐるのである。例へば數年前公にされた氏の

「明治大正史―世相編」の如き、若し筆者の記憶にして誤なければ當時唯一つの専門學術雜誌も之を批評に取上げることなしかつた。人々はかゝるものに少くとも歴史の名を與へることを今なほ頑固に拒まうとしてゐるかに見える。これは氏の如き學問のもつ最初からの運命であつたらしい。然るにかやうな偏頗にもかゝらず氏の學問はその永き年月に涉る勞作の結果として近年益々實のり多き收穫をあげつゝある、昨秋以來相次いで單行の形に於て公にされた數著（『秋風帖』『地名の話その他』等）はその内容いづれも早くは明治末或は大正中期にまで遡つて一度發表されたことのあるものではあるが、然もその後の不斷の修正補訂によつて愈々インテンシヴな大きさを與へられて今日改めてわれ／＼の前に現れることゝなつたのである。就中標記の二著はその取扱ふところよりすればたゞわが國の説話及傳

説の綜統的研究といふべきものに過ぎないが、その問題の及ぶところは極めて廣く且深く、われ／＼はそこに直に全歴史的世界の構造を見、人間の意識の根柢に觸れるものがあるやうに思ふ。筆者が自ら搦らずして茲にこの書を問題にしようとするのも一に一般歴史家が之によつて自らの取扱ふところの史料の意味とその採り用ふところの論理の構造を反思すべきものあるを思つてに外ならない。

「桃太郎の誕生」はわが國民間説話中最も代表的なるこの物語のモティーフの分析から始めて全國各地から採集類別された同種の説話の綿密な比較によりその成立とその後の成長の跡を明にせんことを目的としてゐる。その場合從來同種の問題を考へんとした人々が往々なした様にたゞ桃から生れたといふ一事に着目して直に之を支那に於ける神仙の思想に結びつけ桃に關する文獻のあらゆる博識を盡して兩者の間に傳説の關係なり或は兩者を通じての一般的原理ともいふべきものを論證しようとするが如きことを斥け、桃太郎は必ずしも桃からのみ生れるのではなくして、何からでも生れ出ることを、さし當り瓜から生れた瓜子姫の話のあることが之を證し、兩者を通じて見られるところのものは非凡に秀れた人物は常に異常なる出生を有つといふ古代人の心理に過ぎぬと言はれる。假令他國からの傳來の明なる場合に於ても、なほそれがわが國の説話として土着する爲には、それに先んじて存したわが國人の心的傾向が明にされねばならぬ、同時にまた一つのモティーフが時と處とを異にし

て如何に多様に分化し變形するものであるか、それはたゞ根氣よき現地の採集とそれら相互の比較によつてのみ證明することが出来る。例へば今日全然別種の話と考へられてゐるところのカチ／＼山、舌切雀或は花咲爺の如きものさへ幾多のモティフイケーシヨンを中間において考へるとき必然に桃太郎と結びつくものを有し、更に廣範圍の比較を通して現在に傳はるわが國の說話傳説が殆ど一定の形を有することさへが考へられようとしてゐるのである。氏がそのために類聚された資料の豊富さは眞に驚くべきものであり、この書は宛として我國說話のエンチユクロベテイーとも呼ばるべきものである。氏のこの書に於いて試みんとしたところも畢竟その豊富なる材料を一つ／＼ほごし得る限りほごして、そこに自ら經と緯との筋目を見出さうとしたもので、その態度には恰もぼろ／＼になつた古い裂地に對してその文様とその織目とを見分けようとする和金く同じきものがある。氏の慎重と綿密とは氏をしてその中から二三の主なる糸目を拔出して來て早急に全般を概括することを許さなかつた。従つて本書には結論といふべきものがない。氏によればそれを引出して來るには今日なほ早きに過ぎるといふのであらう。氏はむしろ說話の糸を解きはごしつゝ、その織りなされた仕方を知らうと努める。織物が出来るにはひ(桿)がなければならなかつた。「女性と民間傳承」は正にその點をわれ／＼に教へて呉れる。即ちこの書は殆ど全國各地にわたつてその遺跡といふものを傳へてゐる和泉式部傳説を中心として、その流

布と土着の背後に、說話に假りて信仰を説き歩いた歌比丘尼の存在を明にしようとしたもの、同じことは「桃太郎の誕生」にもその背後に男子の說話業者のあつたことを考へるに於て說かれてゐたのではあるが、就中この書は彼れの最後の章米倉法師の話と共に一つの系統の說話が必ず一定の、それを管理する階級と結びつくものになると何人も疑ふべからざる明確さを以て證示してゐる。それは假令(既に或る人が指摘した様に)その一本の糸に誤があつたとしてもそれが爲に直に全體が解綻びてしまふやうなものではないのである。思考力の柔軟といふか論理の彈力性といふか氏の學問は特に其點に於て類少いものがある。

最後に筆者は氏の學問が近時特に多くの人々の關心を惹きつゝある觀念形態論の問題に多大の暗示を與へるものであることを一言注意したい。蓋し說話は何よりもまづ社會的なものであり、それは一方に於ては直接歴史的存在にその根柢を有すると共に、他面優越なる意味に於ける社會的意識(就中純粹文學演劇等)の母胎となるもの、正しく兩者の中間にあつてその媒介となし社會的意識の構造を考へんとするものにとつて特に見逃し難い領域であるのみならず、新しい學問としての觀念形態論は實にその論理的構造の分析のみでなく、かゝる具體的な表現の理解を通して常に自らの内容を豊にすべきものなるを思ふのである。(「桃太郎の誕生」四六版五七七頁、東京三省堂發行定價二・八〇「女性と民間傳承」四六版三一七頁東京同書院發行定價二・〇〇)(柴田)